

平和の尊さ心に刻む

太平洋戦争終結から67年目の夏、町内でも戦争にまつわる様々な行事が行われました。



▲児童に語りかける神崎さん

8月6日、町内の全小中学校で、一斉に「平和学習」が行われ、映像、写真、語り部から子どもたちは戦争の悲惨さ、平和の尊さを学びました。

上城井小学校では、終戦が目前となった1945年8月7日、米軍機の爆撃を受け、児童・教職員など4名の方が犠牲となりました。67年目の今年、その爆撃で亡くなった教職員中村幸子さん（当時



▲神崎さんの話を聞く児童

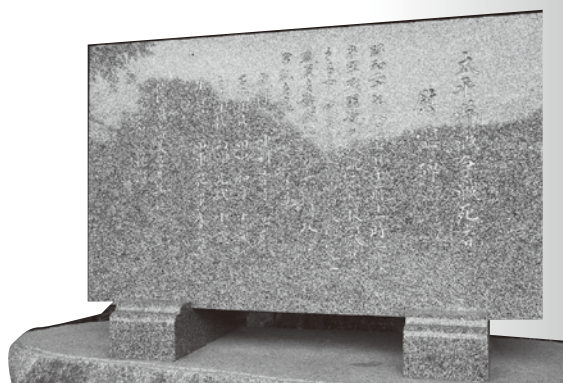
21歳）の姪である神崎智子さんが小学校を訪れ、子どもたちに当時の悲劇、そして平和の尊さを伝えました。

神崎さんは、祖母から何度も当時の話を聞かされたそうです。爆撃の当日、中村さんは出勤後三度も家に戻り、「桃を買っておい

ね」と話し、祖母が「遅れるよ」と言う」と「さらば」と言い残して学校へ向かいました。それが最後の言葉となったそうです。神崎さんは「多くの方に語りつくせない思いがあると思う。皆さんに命の重み、平和の尊さを知ってほしい。平和な日本は皆さんの肩にかかっています」と涙ぐみながら話されました。

神崎さんの話を聞いた児童は「悲しい戦争があったことを絶対忘れないといけないと思った」「神崎さんの話を忘れてないといけないと思う」と、平和の尊さを心から感じた様子でした。

また、8月9日には中央公民館



▲上城井小にある戦没者の慰霊碑



▲築上町戦没者追悼式（8月9日・中央公民館）

で戦没者追悼式が行われました。これは、先の大戦で亡くなられた方々を追悼し、平和を祈念するため毎年行われています。出席者は、戦火に倒れた方々に黙祷を捧げ、戦争のない未来を祈りました。

長い時間を経て、戦争を知らない世代が増えると同時に戦争を体験した方々の高齢化が進んでいます。戦争を知らない世代の私たちは、こうした方々の戦争体験を受け継ぎ、語り継いでいかねばなりません。平和の尊さ、命の重さを戦争を知らない世代が心に刻み、平和への祈りをつなげていきたいと思います。